

杉並区戦争体験

●阿佐谷北四丁目

岡田 篤也

(大正五年生まれ)

一 大戦のあし音(昭和九年)

昭和九年三月、田舎の旧制中学校を卒業した私は、四月に上京して高円寺の第四小学校の近くに居を移し、東京の学校に通い始めた。このころの日記を見ると次のような記述がある。

八月二四日(金) 午後から来たる九月一日、二日に実施する防空演習の予行が行われた。

ここは中野の電信隊に近いので空襲され易い。午後三時ごろ、電信隊付近に爆弾が落ちたので防空団員がバケツを持って駆けて行く。中には、くわえ煙草で走って行く団員もいる。呑気なものだ。

家の前の原っぱでは毒ガスの演習が行われており、小学生が担架で運ばれて行く。

九月一日、二日は両日とも雨降りとなり、夜になって雨足はますます激しくなった。方々で吹き鳴らすサイレンの音が灯火管制の真つ暗闇の空に響きわたって不気味だ。とある。

二 二・二六事件(昭和十一年二月)

通学のために朝早く国電高円寺駅に行くとき電車が不通、開通の見通しは無いとのこと、このとき最初に頭に浮かんだのは「しめた！試験が延びた」ということであった。当日は数学の期末試験の日だった。

この事件では有名な「今カラテモ遅クナイカラ原隊へ帰レ」という下士官兵に告ぐの放送が度々行われたが、途中から市民は麴町方向に向かって畳を立て掛けてその陰に隠れるようにという放送があった。これは二八日に反乱軍鎮圧の奉勅命令が出て二九日に戒厳部隊の総攻撃が行われるために、流れ弾による市民の被害を恐れて放送したのであるが、麴町からは遠い高円寺では誰も畳を上げなかった。

三 日本初空襲(昭和一七年四月一八日)

このころ私は阿佐ヶ谷の自宅から赤羽の内務省土木試験所へ通勤していた。昼時試験所近くの飯屋で食事していると、突然飛行機の激しい爆音とともに「ソ連の飛行機が来た！」と叫びながら人が飛び込んで来た。家と家の間に一瞬、星のマークを付けた翼を見たのである。それ程低空で飛来したの

である。

ソ連との間には日ソ相互不可侵条約があったが、巷ではソ連と戦争になるといふ噂がまことしやかに流れていた。

この初空襲は、北太平洋上の空母を発進したB25爆撃機が高射砲を避けて超低空で東京に侵入、そのうちの数機が荒川を遡って赤羽の染料工場を爆撃し、反転して帰ったものである。この爆撃機は、空襲後中国本土へ帰投した。

四 建物の強制疎開（昭和一九年）

この年の一月に防火地帯設置のため、建物強制疎開命令が出た。我が家の近くで現在櫛通りけしどおりになっていてる所に建っていた家は、全部強制疎開となった。この家の人たちは強制的に引越しをさせられ、空家となった家は、隣組長の指揮の下に使役に駆り出された我々が、雨戸や障子を外してから柱の根元を全部鋸で切り、綱を付けて引き倒すのである。立派な構えの家が土煙を上げて倒れる様は寂しいものであった。

壊した家屋の柱や板材は、参加した人たちに分配して防空壕を造る材料にしたり燃料に使った。

五 食糧増産（昭和一九年）

昭和一九年になると、食糧も欠乏して巷には犬がうろつき野生化して危害を及ぼす恐れが出てきた。都は野犬を買い上げたり、毒餵頭を配布する事態となった。当然我々も庭を耕して南瓜、ハトムギ、里芋などを作った。

我が家では父が丹精して作った南瓜が、一個だけ突然変異のように大きくなった（直径四〇センチ程）。早速区役所の品評会に出したところ、見事に山根区長の賞状を頂戴すること

ができた。

六 東京空襲（昭和二〇年）

荻窪の中島飛行機製作所は、空襲の初期から主要な攻撃目標であった。二月ごろになると小型機が昼間攻撃して来るようになった。同製作所は我が家の真西二・五キロメートル程のところにある。東方向から綺麗に編隊を組んだ小型機が飛来して同製作所を一機ずつ急降下爆撃する光景は、戦争映画のように整然としており、防空壕から怖々と首を出して観戦したことが思い出される。

三月一〇日のB29三三四機による大空襲は、午前〇時から二時間半程続いて下町を火の海にした。阿佐ヶ谷では機影が見えなかつたので安心していたが、間もなく東の方向が火災で明るくなってきた。当日の火災は火元が平面的に広がっているというよりは、一個所へ家を積み上げて燃やしたような巨大な火の三角柱のように見えた。試みに翳かげした新聞が十分に読める明るさであった。

五月二五日、二六日の大空襲では、中野、高円寺、阿佐ヶ谷も被災していよいよ身近に迫ってきたことを痛感した。いつものような夜間空襲も、このころになると高射砲の応戦がないのでB29は超低空で飛来し、近くの櫛林を覆うような大きな銀色の機体に火災の光が反射して、異様な輝きを発して不気味であった。

間もなく家の前の道路には高円寺方面から避難してきた人たちが続いて、「僕のお家、もう燃えちゃったね」という子供の声がかえってきた。

私の戦争体験記

● 成田東四丁目

粕谷 堯男

(昭和五年生まれ)

おにぎりの山

昭和二〇年三月一二日午前一〇時ごろ、この日は一晩で一〇万人もの焼死者を出した三月一〇日の東京大空襲の翌々日の朝の事です。焼け出された人々が下町から避難して来ました。その受入先が杉並区の東端、和田にあった農林省蚕糸試験場でした。

私の母が国防婦人会の役員をしていたので、その日も早朝から罹災者のお世話をしておりました。私は母へ用事の伝言を伝えるに蚕糸試験場の東門のそばにあった講堂へ向かいました。途中、バスやトラックで運ばれてきた避難民の方々にすれ違いました。どの人の顔もススとヨゴレで真っ黒になっていました。中でも一番ひどい人は、半身以上が焼けただけ、衣類と皮膚が貼り付き、赤い肉が垂れさがり、ボロを吊るしているようでした。そして両手を前の方へたらし、足を引きずって歩いて来ました。こんな重症の人でも担架へ乗せてもらえなかったようです。あとで聞くと、この人は午後三時ごろ蚕糸本館の廊下で亡くなられたそうです。他にも一、二名

死亡されたそうです。

母を捜して講堂に入って、思わず足を止めてしまいました。それは床いっぱいに畝うねをなして山また山の「おにぎり」の山なのです。一個一合位の米のおにぎりが高さ五〇センチ位、幅七〇〜八〇センチ、長さ数メートルに積まれた畝が幾重にも並び、小学校の教室の三、四室分位の広さいっぱい積んであったのです。これは、区役所が一日から一二日にかけて区内各地で、婦人会の人々を動員して作ったものを車に積んで運び込んだものと聞きました。

下町から到着した罹災者たちは、ここでおにぎりをもらい一休みしてから、他の受入場所（お寺など）へ別れて行きました。

当時の食糧事情と言えば、主食はもちろん、代用食さえまなならぬ、なんでも食べられれば良かった時代に、このおにぎりの山には驚きました。おにぎりは、ここからまた車に積まれて都内の罹災地へ運ばれたそうですが、運ぶ車も少なく、受入罹災者の数も予定より少なかったため、相当数が残って

いました。数日後傷み始め、奉仕した婦人会の人や近所の人々に分け与えられました。私も少々スエタ味のにおにぎりを食べた記憶があります。それでも米の飯を食べられたのは幸せでした。おにぎりの山を見たのは、これが初めて終わりでしょう。

焼夷弾

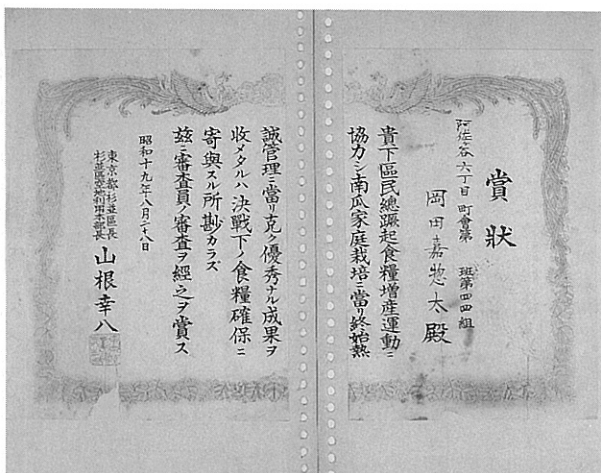
昭和二〇年五月二五日の空襲では、中野区境から方南町、代田橋(大原交差点)、和泉町、堀ノ内、和田、高円寺と、今の環七に沿って、高円寺一丁目まで焼けました。

大火になると、火の勢いは凄いもので、炎は青梅街道くらいはうねりながら反対側へとどきます。それは強い風が吹くからです。その強い風に吹き飛ばされて大きな火粉(五〇センチ角のものはざら)が空中を飛んで行きます。細かい火粉はそこいら中に散らばっていました。我が家の三軒先まで焼けましたが、幸い我が家は焼け残りしました。煙と熱風はもの凄いいのです。

二六日午後、堀ノ内の友人の安否を気づかって様子を見に行き、途中妙法寺の裏を通過して西隣のサツポロ巻きの昆布工場の脇へ出たら、工場の建物は全焼していました。地下に埋めた桶の中に昆布が水に浸って焼け残っており、塩俵が焼け塩が塊になっていました。

友人宅は、堀之内小学校のそばにありましたが、焼け跡になっていました。そして驚いたのは、堀之内小学校の校庭に

は一坪に一発宛くらいに油脂焼夷弾が突きさささってしました。帰り道、焼け残りの焦げ臭い昆布をかじりながら帰った記憶があります。



区民総決起食糧増産運動に協力したことに対する賞状
 〈提供 岡田篤也さん〉

戦争の悲惨と苦しき

●阿佐谷南三丁目

木崎 サワ子

(大正一〇年生まれ)

私の家族は、大正の大震災後直ぐに八王子より阿佐ヶ谷に移り住みました(場所は今の荻窪―阿佐ヶ谷駅行のバスで南三丁目の停留所になっている所)。店を構え裏には工場もあり、農家の自家用米の貸つきと米穀商をしていました。

昭和一二年に、蘆溝橋事件が勃発し、その時は女学生でしたので兵隊さんに慰問袋を送ったり、白衣の着物など縫う日が多くなりました。私の親戚の人も戦死し、従弟の人も少年航空兵に志願して亡くなってしまいました。

そのころ空にはサーチライトが夜空に放射状に照らされていました。警戒警報が発令されますと、灯がもれないように黒い布でおおったりしました。縦五センチ横二〇センチぐらいの小さな木箱を作りコードをつないでよくパンもやき、今思いますとあの木箱を今も取っておいたら、ちよう宝するよな思いです。でも作り方も忘れてしまいました。配給米に細長い外米が配給され、あまりおいしくありませんでしたが頂きました。

昭和一二年、漢口陥落祝などあり、また、米、味噌、醤油、

木炭、マッチなど必需品一〇品目が切符制になり、「出征兵士の家」には、この札を掲げました。

昭和一四年ごろだと思いますが、私の家が青梅街道道路拡張のため、杉並警察署の左際に米屋の空家がありましたのでそこに移転しました。そのころからお米は配給制度になり、米屋の主人は月給取りになって、配給所でお米、大豆、粉、パン等の配給をするようになりました。

昭和一七年三月五日、東京に初の空襲警報が発令され、昭和一八年一〇月二一日、学徒出陣の壮行会が神宮外苑で行われ、戦況はだんだんと激しくなり、三月二九日に学徒勤労動員が実施されました。弟なども飛行機作りに動員されました。このころ神風特別攻撃隊が初出撃し、その後東京に次々と空襲があり、疎開する人が多くなり、空家も大分多くなりました。

私の家でも警察の傍らでしたので、建物強制疎開にあい、昭和二〇年三月末日までに立退く事になっていました。それで近所の心当たりを探しましたが、適当な所がなく、やむを

得ず八王子に疎開することになり、父はリヤカー、大八車で荷物を運んで下さいました。父は健康で力持ちでありましたので、皆自分でやってしまいましたが、無理が出て床に就いてしまいました。何も無い時でしたので夏みかんが食べたいと言っても食べさせられず、注射は充分出来ましたが、本当に食物には困ってしまいました。死ぬ体ではなかったのですが、五月九日に亡くなってしまいました。

疎開先で父と私とで配給所で働くわけでしたが、私一人で働くことになりました。そこは中野町という所で、相模が近いせいでしょうか、艦載機が屋根すれすれに飛び、人を見ると機銃掃射をしますので、生きた心地はしませんでした。

昭和二〇年八月一日、配給所に今晚空襲警報があるとの通知があり、保有米を一粒残さず配給する事になり、全部渡し終わって家に帰ったのが夜八時ごろだったと思いますが、家に着くと同時に空襲警報が発令され、山の方へと逃げました。空は真赤で、焼夷弾が落ちていたようでしたが、無我夢中で逃げました。少したつて感じたのですが、それは他方に落ちていたために空が赤く染まっていたのです。警報が解除になり、また家に戻り一服している人、寝込んでしまった人、色々でしたが、私の家では寝込んでしまい、お隣の方が「焼夷弾が落ちていますよ」と起こして下さいましたのでまた山の方へと逃げ、そうこうしている内に夜が明け、私の住んでいる万町は一つ残らず全滅でした。

赤土で出来た山のような防空壕に避難し、にぎり飯、かん

づめ、衣類など配給を受け五日程過したでしょうか。阿佐ヶ谷の家に引き上げるしかないと思いました。そこは貸家として人に貸してあり、その家族も疎開し留守番一人が住んでいました。引き上げた後で聞きましたら、借りていた人が、私たちは帰らないと思ったのでしょうか、他人に又貸しの約束をしていました。その貸す約束の前の晩に私たちは帰って来たのですが、あくる日他の人に貸す事になっていたことを知らされ、色々なデマの飛ぶ中で思い切つて帰って来てよかったですと思っています。家には困りませんでした。配給、配給で大変でした。昭和二〇年八月一五日正午、天皇の戦争の終結の詔書の放送があり、第二次世界大戦は終わりました。

つくづく思いますことは、建物強制疎開さえなければ、父も亡くさずにすんだのではないかとくやくしてくやくして仕方ありません。

戦争の悲惨さと苦しさを少しでもお解り願えればと、ほんの切れはしのような事を書かせて頂き、有り難うございました。

戦中戦後のことについて

●上荻二丁目

北嶋 英男

(昭和一一年生まれ)

昭和一八年四月、僕は桃井第一国民学校へ入学しました。先生は「日本は戦争に負けたことはない」「もう一步で勝つ」と言われました。

数名の集団で登校しました。途中で警戒警報が発令されると自宅へ戻りました。

父(馬次郎)は国鉄の新宿電力区勤務でした。当時、二回、父に連れられて靖国神社例大祭に参拝に行ったのを良く覚えています。

昭和一九年九月一四日、父(三七歳)が応召することとなりました。前日、上荻窪町会の庭で父とTさんともう一名、計三名の壮行会が行われました。父は軍服を着用し、胸には勲七等青色桐葉章と従軍章と赤十字章を付けていました。町会長、陸軍中将より激励の言葉がありました。その夜、我が家にて壮行の宴が行われ、多勢の人が来られました。

翌一四日、暗い内に起こされました。いよいよ入隊の日です。親戚・知人数が門前に集まりました。伯父さんの発声で「北嶋馬次郎君万才〜」。そして父は我が家を後にし

たのでした。荻窪駅まで行列して送りました。環八道路を南下して中央線大踏切を渡って荻窪駅南口へ到着しました。東の空が明るくなってきたころ父は電車に乗って成田の部隊へ行きました。

九月二二日、母と一緒に面会に行きました。母は一歳半の弟をおんぶしていました。父の部隊は小学校にあって、佐倉東部第八四部隊でした。その日は面会日ではなく、兵隊さんたちは訓練に出ていました。午後二時ごろ帰って来ると知らされました。

やがて、兵隊さんたちが帰って来ました。その時父と母はすぐにお互いに分かったとのことでした。そして学校の裏の人目に付かない所で逢うことが出来たのでした。父はもうすぐ遠くへ行くと言っていました。

その時が最後となりました。そして父はフィリピンへ派遣されたのでした。

比島派遣軍威第一四二一〇部隊Y隊北嶋馬次郎から、はがきが一通来ました。そして昭和二〇年三月二四日、ルソン島

ラグナ州アンチポロの山の中で戦死しました。後で分かったのですが、米軍機の爆撃で全滅とのことでした。

昭和二〇年四月二八日夜、防空壕へ泥棒が入り、皮製大型トランクに入れてあった母の着物数点（トランクごと）と国民服の帽子が盗まれました。

当時、金属類を献納しました。お寺の梵鐘まで献納したのは寂しかったです。

我が家の北一〇〇メートルの地に（桃井一の二の九）二五〇キロ爆弾が落ちました。僕は防空壕内に立っていました。

爆発音とともに震度五位揺れたのを覚えています。

夜中に中島飛行機工場のサイレンが鳴ると、続いて井荻信用組合のサイレンが鳴る、警戒警報発令。僕たちはすぐに防空壕へ入りました。三月一〇日の下町大空襲のことは決して忘れることが出来ません。東の空が赤くなり大勢の人が亡くなられました。僕は子供心にこの戦争は勝てないと思いました。

昭和二〇年四月僕は三年生になり、二九日集団疎開で宮城県涌谷へ行きました。

夕方、学校へ集合して荻窪駅まで予科練の歌を歌いながら行きました。そして上野二時発の特別列車で涌谷へ向かったのです。僕たちは旅館山鉄へ入りました。規則正しい生活と学習で、親と離れたこともさびしくはなかったです。

六月中旬、僕たち約五〇名は南郷村へ移動しました。公民館で生活しました。とても豊かな村で当時、軍へ飛行機二機

献納したという話を聞きました。近くを成瀬川が流れ、とても良い所でした。川で良く遊びました。夜、螢をたくさん見かけたのを覚えています。

南郷村へも米国の艦載機が飛来して機銃掃射をやられたのを覚えています。また、石巻へ艦砲射撃があり、「ドーン、ドーン」と不気味な音が多数聞こえました。

八月一五日正午に公民館の庭に整列してラジオの玉音放送を聞き、負けたのだがこれでいいのだと思いました。

九月初旬、涌谷へ戻りました。食事の量は十分とはいええず、身体はスマートになりました。たまに三時のおやつにもらったビスケットは美味かったです。

僕たち疎開学童のために演芸会を開いて下さいました。今日、想い出して見ると、当時お世話になった方々のことを決して忘れてはならないと思っています。

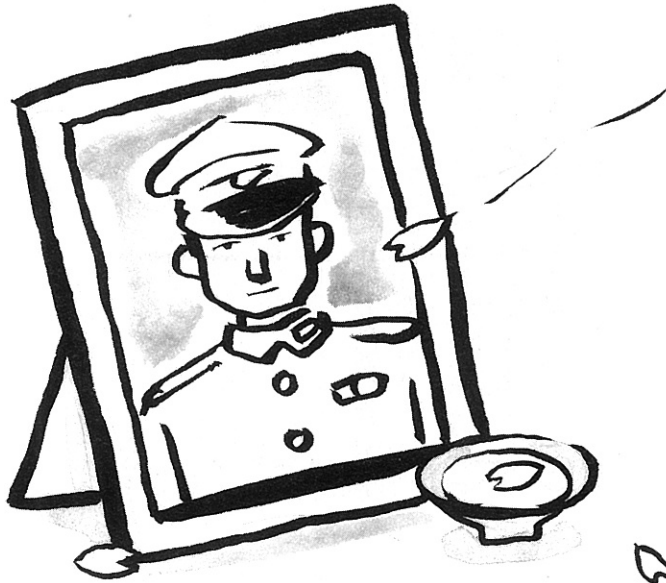
一月初旬、夜行列車に揺られ東京へ帰って来ました。中央線の車窓から見る光景は無残なものでした。荻窪駅周辺は家屋が取り壊されて東の方に武蔵館のコンクリートの建物だけがあつたのが印象的でした。駅から学校まで歩いて行き、カンパンを一袋貰って我が家へ帰りました。

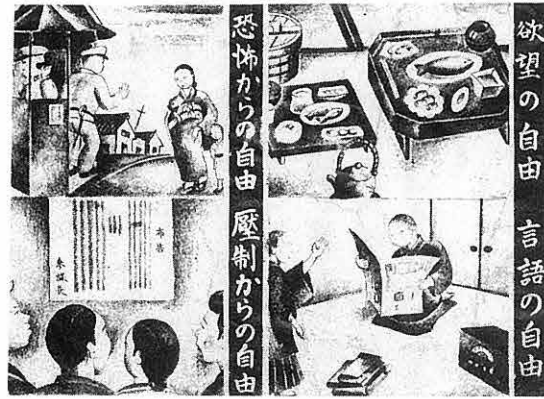
昭和二二年五月一日付で父の死亡告知書（公報）が来ました。昭和二二年一〇月一四日安井都知事より「英霊伝達についての通牒」を戴き、母が陸軍伍長北嶋馬次郎の英霊を芝増上寺へ受け取りに行きました。白木の箱の中には位牌が入っていました。

昭和二二年一月二四日、父の葬儀が自宅にて行われました。昭和四五年秋、戦没者叙勲で朱塗の木杯一組を戴きました。昭和五二年春、父の三三回忌に親戚の者たちにこの木杯でお酒を呑んでもらいました。

戦後、僕が働き出すまでは本当に苦しかったです。昭和五八年三月と昭和五九年三月に都遺族会のフィリピン戦跡巡拝の旅に参加して、父の戦死した所へお参り出来たことを嬉しく思います。

後世、二度とこのようなことの起きないことを願いつつ筆を置きます。





アメリカ軍が心理作戦のために撒いたビラ
〈提供 井口金男さん〉